

岩手県人と岩手大学学生の性格特性

—— Big Five の観点から ——

鈴木 光* 阿久津洋巳**

(2007年2月5日受理)

Hikaru SUZUKI, Hiromi AKKUTSU

Personality Traits of People in Iwate Prefecture and Students in Iwate University

1. はじめに

人間の行動は、個人内では比較的一貫している。例えば、お喋りな人は、特定の場面でお喋りなのではなく何処でもお喋りをするであろう。このように個人内で一貫している行動パターンが「性格」もしくは「性格特性」と呼ばれる。本研究は、性格の特性から見ると岩手県民はどのように捉えられるかを探ってみた。

「県民性」という言葉があるように、ある限定された地域に住む人々の性格に対して、我々は何らかの特定のイメージを持っている。例えば、岩手県の県民性としては「頑張り屋」「愛想が良くない」「忍耐強い」などといった特徴が想起されるかもしれない。こうしたイメージが住民の實際を的確に描き出しているかどうかは分からないが、長い年月にわたる経験から推察され生み出されてきたものではあろう。このようなイメージを明確な性格特性として記述するために、現代心理学の性格理論の枠組みを用いることができるだろう。宮城音弥は岩手県人をクレッチマーの性格類型のひとつである「分裂質」に分類している（宮城, 1977）。分裂質は非社会的、神経質、生真面目などの特性を持つ。

人の性格を分類したり記述する場合に、古くはクレッチマーやシェルドンの性格と体格の類

型、近年は性格特性（例えば Eysenck の外向性と神経症的傾向）が使われてきた。1980年代末からは、性格に5つの次元を仮定する理論が広く受け入れられている。アメリカをはじめ、世界各国で検証されつつあるこの仮説は、Big Five あるいは5因子モデル (Five Factor Model) などと呼ばれている (Tupes & Christal, 1961 ; Norman, 1963 ; Costa & McCrae, 1988 ; McCrae & Costa, 1999)。基本的な性格の次元の名前は英語ではほぼ合意に達しており、Extraversion, Agreeableness, Conscientiousness, Neuroticism, Openness である。特性によってはいくつかの日本語訳があるが、本論文では、村上・村上 (1997) および村上 (2006) に従って、上記の英語に対して順に外向性、協調性、良識性、情緒安定性、知的好奇心という訳語を使う。研究者や被験者が異なっても、上記の5因子が繰り返し現れることが確認されている。加えて、異なる文化圏においても、ほぼ同様の5因子が見出されている。また、これらの因子は頑健で、長期間安定している (Big Five を使った個人差の研究の最近の review は、Ozer & Benet-Martinez (2006) 参照)。Big Five 仮説では、性格テストの得点から個人の性格を5次元空間上の座標に位置づけ、数量的に分類・記述する。この5つの特性を組み合わせ、解釈することで、ほ

とんど全ての性格が十分に記述できると考えられている。5因子理論が考える性格特性とは、行動のパターンではなく、直接観察が不可能であり、直接内省的に観察できるものでもない。行動から推測される心理学的実体 (psychological entities) と仮定されている (McCrae and Costa, 1999, p.143)。他の現代の性格理論と同じく生物学的基礎を仮定するが、その具体的詳細はいまだに不明である。

性格5因子の各因子 (以後特性と呼ぶ) を簡単に紹介すると、外向性が高い人は、社会的スキル、多くの友人関係、進取の気性に富んだ職業への興味、スポーツやクラブへの参加の傾向を持つ。協調性が高い人は、寛大な態度、協力心がある、ものの言い方が穏やか、くみしやすい人と見られる、などの傾向をもつ。良識性が高い人は、指導者のスキルを持つ、長期的展望を持つ、責任感が強い、信頼できるなどの傾向を持つ。情緒安定性が高い人は、高い自尊心、穏やか、気が動転しにくい、などの傾向をもつ。知的的好奇心が高い人は、知的、想像的、独立的、多趣味、様々な職業への関心などで特徴付けられる (John & Srivastava, 1999; McCrae & Costa, 1999)。上述した宮城の説を性格の5因子から解釈すると、岩手県人は外向性は低い (非社交的)、良識性が高く (生真面目)、加えてやや情緒不安定 (神経質) といえるかもしれない。

岩手県人が、外向性は低く、良識性が高いとすると、控えめで真面目、保守的で用心深い、容易に他人とは打ち解けない、などの行動傾向を予測できる (村上・村上, 1999)。また、良識性が高く、情緒が不安定であるならば、気難しい人といえる。自分に厳しく、責任感を持って仕事に精力的に取り組む、自分の勤勉さを相手にも強要する、などの行動傾向を予測できる (村上・村上, 1999)。3つの特性を組み合わせた解釈は、容易ではない。非社交的で生真面目で神経質とはどのような人か? 控えめで責任感が強く几帳面で気難しい人であろうか。

本研究は、「岩手県の県民性」を明確に記述す

る手段として、Big Five 仮説を用いる。具体的には、Big Five 仮説に基づいて作成された「主要5因子性格検査」を用いて、岩手大学学生、岩手県教育委員会の講習を受けた岩手県の小・中・高等学校の教師及び職員、医療系専門学校の学生を対象に質問紙を実施した。収集したデータに基づき、性格の5因子に関して3群の性格を調べ、3群間の性格の共通点及び相違点について検討した。この3つの群に共通して現われる特性があれば、それを「岩手県民の県民性」と見なすことができるであろう。また、3つの群間でどれかの特性に違いがあるとすれば、それは県民性ではなく別の要因によって生じた違いである、と言える。

本研究の興味は、岩手県民の Big Five がどのような傾向を示すか、岩手大学の学生は他の2群と比べて何か性格に違いがあるか、という2点にある。

2. 方法

調査対象

本研究の調査対象は、岩手大学の学生 231 名 (男性 86 名, 女性 145 名), 岩手県の小・中・高等学校の教職員 105 名 (男性 20 名, 女性 85 名), 医療系専門学校の学生 71 名 (男性 20 名, 女性 51 名) である。(各群の年齢の平均値と標準偏差は不明であるが、小中高校の教職員の群が他の2群より平均年齢が高いと推測する理由がある。)

調査時期と方法

2005年6月から10月にかけて、質問紙を講義、演習、講習会の時間に配布し、原則無記名で回答を依頼し調査を実施した。

使用した尺度

使用した尺度は、村上・村上 (1997) による「主要5因子性格検査」を質問紙として印刷して使用した。この質問紙は、Big Five の項目である外向性・協調性・良識性・情緒安定性・知的的好奇心に、受験態度が表される尺度である頻度・建前が加わった7項目、計70問の質問から構成されて

いた。

3. 結果

質問項目を5つの性格特性に分けて、分類された項目の合計得点を各個人ごとに計算し、これを公表されている換算表を利用して標準化しT得点を算出した(村上・村上, 1999)。T得点は、平均50、標準偏差10で正規分布する性質を持つ。この質問紙は日本の様々な地域の人たちからデータを集めて標準化されているので、われわれのデータを直接日本人全体の平均と比較できる利点がある。日本人全体の平均は各特性で50である。

質問紙中の「頻度」と「建前」の得点に基づき、不適切な回答をしたと考えられる個人をグループ集計から除外した。全被検者の約5.4%が分析から除外された。その詳細を見ると、岩手大学の学生は、男性6名、女性10名を削除して、215名(男性80名、女性135名)を分析対象とした。小・中・高等学校の教職員は5名削除して(男性1名、女性4名)、100名(男性19名、女性81名)を分析対象とした。医療系専門学校の学生は1名(男性1名)を削除して、70名(男性19名、女性51名)を分析対象とした。

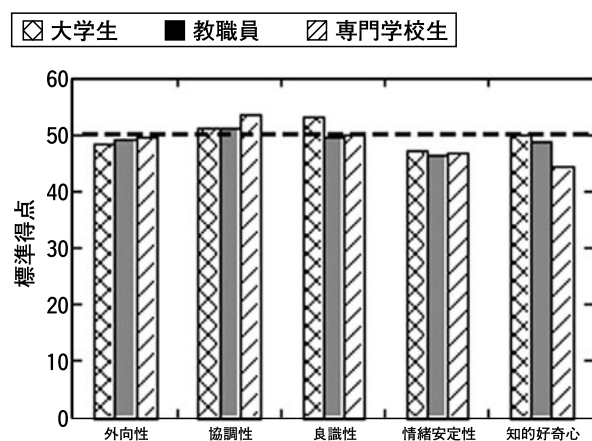


図1. 性格5因子の標準得点を3群別に示す。3群とも協調性が50点より上にあり、情緒安定性が50点より下にある。良識性と知的好奇心は3群間で異なる。

図1に被検者群別に5つの特性平均得点を示す(平均と標準偏差、被験者数を付録の表1に掲載する)。目立つ傾向は、全国平均(50点)に比

べて、岩手県の大学生、教職員、専門学校生の3群は協調性が高得点、情緒安定性が低得点である。協調性、良識性と知的好奇心については、3群間に違いがうかがえる。外向性は、大学生が全国平均より低い、教職員と専門学校生は全国平均とほぼ同じである。以下に5因子を順に詳しく見ていく。

最初に全国平均と比較した結果を述べる。統計的検定には、z検定を使った(両側検定)。

- (1) 外向性 図1からうかがえるように、大学生は、全国平均より低い($z = 2.1477$, $p < 0.032$)。教職員と専門学校生は全国平均と違いがなかった($p > 0.5$)。
- (2) 協調性 これも、図1の印象とほぼ同じく、2群は全国平均より高かった。大学生($z = 2.23$, $p < 0.026$)、教職員($z = 1.65$, $p > 0.05$ 有意差なし)、専門学校生($z = 4.323$, $p < 0.001$)。
- (3) 良識性 図1の印象と同じく、大学生は全国平均より高い($z = 5.266$, $p < 0.001$)、教職員と専門学校生は全国平均と違いがなかった($p > 0.5$)。
- (4) 情緒安定性 図1の印象と同じである。3群は、情緒安定性の得点が全国平均より有意に低かった(例えば、大学生は $z = 3.99$, $p < .0001$)。
- (5) 知的好奇心 大学生は、全国平均と違いがなかった($p > 0.5$)。教職員も全国平均と違いがなかった($z = 1.47$, $p > 0.14$)。専門学校生は全国平均より低かった($z = 5.01$, $p < 0.001$)。

次に、協調性、良識性、知的好奇心について3群間で各性格特性を比較するためにboxplot(箱ひげ図)を図2から4に示す。

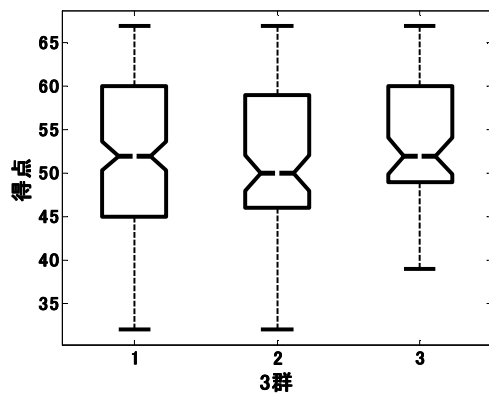


図2. 協調性得点を3群間で比較した。1は岩手大学生，2は教職員，3は専門学校生。くさび型のへこみにある帯は中央値を表し，箱の上下の縁は75パーセントイルと25パーセントイルを示す。上下に長く伸びた点線の端にある横線は，最大値と最小値を表す。くさび（ノッチ）の端は，95%信頼区間を表し，ノッチが重ならなければ，ほぼ5%水準で有意差がある。3群間で違いがないことが見て取れる。

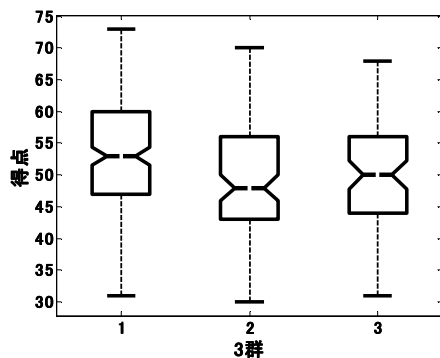


図3. 良識性得点を3群間で比較した。1は岩手大学生，2は教職員，3は専門学校生。岩手大学生が，他の2群より高いことが見て取れる。

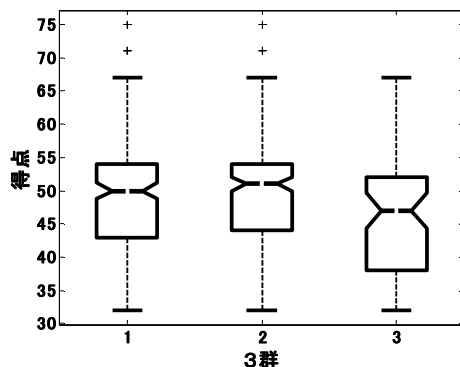


図4. 知的好奇心得点を3群間で比較した。1は岩手大学生，2は教職員，3は専門学校生。1と2のグラフの上の方にある+印は，外れ値を表す。専門学校生が，他の2群より低い。

図2～4から得られた印象を確かめるために1要因の分散分析を行ったところ，協調性では3群間に有意差がないが ($F = 2.03, df (2,382), p > 0.13$)，良識性では3群間に有意差があり ($F = 7.07, df (2,382), p < 0.01$)，知的好奇心でも3群間に有意差がある ($F = 9.85, df (2,382), p < 0.001$) という結果を得た。差が見られた良識性について，TukeyのHSDを使って群間の比較を行ったところ，岩手大学生が他の2群より有意に高かった ($p < 0.05$)。知的好奇心について同様にTukeyのHSDを使って比較したところ，岩手大学生と専門学校生の間でのみ有意差が見られた ($p < 0.05$)。

4. 考察

最初に，結果の解釈にあたって注意しておくことがある。全国平均との比較は，村上・村上(1999)による得点の標準化を使って行われ，全国平均が50と仮定されている。この標準化は，村上らによって日本全国にわたってランダムサンプルリングで被検者を選ぶという周到に計画された方法でなされた。調査有効対象者は全部で1166名であったが，世代別標準化を目指したため，本研究の被検者に相当する青年期(12～22歳)の対象者は254名(男性123名，女性131名)，成人前期(23～39歳)の対象者は313名(男性130名，女性183名)と比較的限られていた。本研究と同じ質問紙を使って性格特性を調べた研究は他にあるが(大野木，2004)，標準得点は報告されていない。したがって，「主要5因子性格検査」の5つの因子の得点を，村上・村上(1999)に従って標準化したときに，全国平均が50となるかどうか判断するのは，今後の研究報告を待つ必要がある。このような制限のもとで全国平均を50と仮定して，結果の解釈を進める。

情緒安定性において，大学生・教職員・専門学校生の全ての群と全国平均との統計的有意差が確認できた。岩手県人は，敏感でやや情緒が不安定であるため，ストレスがあると不安をもちやすい傾向があるようだ。この結果は，岩手県人に神経

質の特性を見た宮城の考えに一致する。しかし、外向性に関しては、岩手大学生が全国平均より低いだけで、他の2群は全国平均と違いがなかった。岩手県人が、内向的で非社交的とはいえない。これに対して、協調性の得点は3群とも全国平均より高く、岩手県人が協調的傾向をもつことを示唆する。この協調性の特性は、人間関係において周りの人に同調しやすいか、自主独立を好むかという側面も含む。協調性の高い個人は、同調性が高いと判断される。良識性については、大学生の得点が全国平均よりも有意に高く、「岩手県民は勤勉」といった従来の県民性の考えと一致する結果となった。しかし、大学生以外の2群では全国平均との有意差が見られなかったため、ただちに「岩手県民は勤勉」と断言することはできない。知的好奇心については、大学生と教職員は全国平均と違いがなかった。この特性は、良識性や外向性の場合と同様に大学生・教職員・専門学校生3群の個性が現れたと解釈できるであろう。

情緒安定性と協調性において、岩手県人は全国平均と異なると考えられる。情緒安定性が低く、協調性が高い人とは、どのような人であろうか。村上・村上(1999)の説明では、協調性でやや高得点を得る人を、暖かみがあり、誰にでも親切で優しい傾向がある。困っている人を見ると気持ちが動かされ、同情したり、何か力になれることはないかと考える。マイナスの側面として、不本意なことがあっても文句を言わないので、他人の思うように利用される傾向がある。他人を優先するため、自分の気持ちや生き方が犠牲にされることがあるかもしれない。このような解釈は、「雨にも負けず…」の傾向に通じるようで、岩手県が生んだ有名な詩人を思い出させる。

同じく村上・村上(1999)によると、情緒安定性がやや低い人は、不安や緊張がやや強く、気分が安定しない。優柔不断で気が小さく、びくびくしがち。対人関係や自分の生活に不満を抱くことが多い。あまり好ましい性格とは見えないが、この傾向は、岩手県が生んだ有名な歌人、石川啄木に少し当てはまるであろうか。興味深いことに、

宮城も宮沢賢治と石川啄木を岩手県を代表する性格として例に挙げている。

岩手大学の学生についてみると、協調性と良識性は高いが、その反面やや内向的で情緒不安定という人物像が描ける。真面目で勤勉、我慢強く協力的、無口でおとなしいが内に秘めた情熱を持つ、しかし、やや気分が不安定で心配性。時に嫉妬やねたみの感情を持つ、という解釈もできるであろう。

北東北地方は、関西や九州地方に比べると、その気候と地理的条件のために近世にいたるまで人の行き来が少なく、関西や九州地方ほどには、異なる遺伝子が混ざりにくかったかもしれない。今日でも、岩手大学の多くの学生は、東北地方を出ることを希望しない。遺伝子がこの地方に残るのである。さらに、その文化的規範は、特定の性格特性を助長するように働いたであろう。性格の地域特徴を見るとき、このような大規模な自然の実験を想像することができる。マスメディアの影響は、過去50～60年のことであり、さらに、家庭の躾や親の養育態度が子どもの性格に影響する程度は、以前に主張されていたほど大きくない。1980以降行動遺伝学の研究は、家庭のような環境要因が性格に限られた影響しか持たないことを明らかにしてきた(例えば、Bouchard, Lykken, McGue, Segal & Tellegan, 1990)。岩手県人の性格の特徴というものがあっても不思議ではない。

岩手県の県民性を考察するという目的であったが、質問紙を実施するに当たり、回答者に自分の出身都道府県を記入してもらうことはしなかった。大学生・教職員・専門学生ともに岩手県出身者が多く、また、実際の出身よりも「今現在、岩手県で生活しているかどうか」を重視したことが出身を問わなかった理由である。

5. 結論

本研究は、性格の5因子を適用して岩手県人の性格特性を調べた。3つの被検者群は共通して全国平均よりやや高い協調性とやや低い情緒安定性を示した。3群が共通して外向性が低いという結

果は得られなかった。また3群が共通して良識性が高いという結果も得られなかった。これらの点で、無愛想で、忍耐強い頑張り屋という岩手県人ステレオタイプには一致しなかった。他方、宮城音弥が指摘したように、「分裂質」(クレッチマーの性格類型)に近いという解釈には部分的に一致した。特に、岩手大学の学生については、非社会的、神経質、生真面目という特性は、比較的良好に当てはまるようである。

付録

表1 性格5因子の平均得点と標準偏差を3群に分けて示す。

	岩手大学生		教職員		専門学校生	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D
外向性	48.5	10.1	49.5	7.6	49.6	9.3
協調性	51.4	9.4	51.3	7.9	53.7	7.2
良識性	53.5	9.5	49.7	10.0	50.1	8.5
情緒安定性	47.4	9.3	46.5	9.3	46.9	8.8
知的好奇心	50.2	9.9	48.9	7.5	44.8	8.7

S Dは標準偏差を表す。

引用文献

- Bouchard, T. J. Jr., Lykken, D. T., McGue, M., Segal, N. L., and Tellegen, A. 1990. Sources of human psychological differences: The Minnesota study of twins reared apart. *Science*, 250, 223-228.
- 藤島寛, 山田尚子, 辻平治郎. 2005. 5因子性格検査縮小版 (FFPQ-50) の作成. *パーソナリティ研究*, 第13巻, 第2号, 231-241.
- McCrae, R. R. and Costa, P. T. 1999. A Five-factor theory of personality. In *Handbook of Personality*. Second Edition, Eds. Pervin, L. A., and John, O. P. Guilford Press, New York.
- 宮城音弥 1977. 日本人の性格. 東京書籍.
- 村上宣寛・村上千恵子. 1999. 性格は五次元だった. 培風館
- 村上宣寛・村上千恵子. 1997. 主要5因子性格検査の尺度構成. *性格心理学研究*, 第6巻, 第1号, 29-39.
- 村上宣寛・村上千恵子. 1999. 主要5因子性格検査の世代別

標準化. *性格心理学研究*, 第8巻, 第1号, 32-42.

村上宣寛 2006. 心理尺度のつくり方. 北大路書房

大野木裕明. 2004. 主要5因子性格検査3種間の相関的資料. *パーソナリティ研究*, 第12巻, 第2号, 82-89.

Ozer and Benet-Martinez. 2006. Personality and the prediction of consequential outcomes. *Annual Review of Psychology*, 57, 401-421.

謝辞

本研究は、2006年度岩手大学学長裁量経費(教育研究支援経費)の補助金を受けて行われた。記して謝意を表したい。調査に協力して下さった岩手大学学生、岩手県内の小学・中学・高等学校の教職員の皆様、盛岡市内の専門学校の学生の皆様に感謝します。